

ドイツにおける就学前教育カリキュラムの改革動向 ：言語教育を中心として-

著者	中西 さやか
抄録	<p>本稿では,知的教育やリテラシー教育をめぐってドイツの幼児教育ではどのような対応がなされているのかを明らかにするために,言語教育を中心とする就学前教育カリキュラムの改革動向について整理・検討した。その結果,ドイツでは移民をはじめとする社会的困難を抱える子どものリテラシー教育が大きな課題とされており,カリキュラムの中では日常生活を通して子どもの言葉を育成するための教育課題が明示化されていることが明らかとなった。</p> <p>In this paper, we organized and studied reform trends for pre-school education curriculum that are centered on language education to clarify how intellectual education and literacy education are dealt with in German early childhood education. The results revealed that, in Germany, literacy education has become a major issue for children facing social difficulties, including immigrants. In order for the curriculum to foster language in ...</p>
雑誌名	紀要
巻	9
ページ	99-105
発行年	2015-03-31
出版者	名寄市立大学
ISSN	18817440
書誌レコードID	AA12272535
論文ID (NAID)	110009886955
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001581/



ドイツにおける就学前教育カリキュラムの改革動向

-言語教育を中心として-

中西さやか¹⁾*

¹⁾名寄市立大学短期大学部児童学科

【要旨】本稿では、知的教育やリテラシー教育をめぐってドイツの幼児教育ではどのような対応がなされているのかを明らかにするために、言語教育を中心とする就学前教育カリキュラムの改革動向について整理・検討した。その結果、ドイツでは移民をはじめとする社会的困難を抱える子どものリテラシー教育が大きな課題とされており、カリキュラムの中では日常生活を通して子どもの言葉を育成するための教育課題が明示化されていることが明らかとなった。

キーワード：就学前教育、カリキュラム、言語教育、ドイツ、リテラシー

I. はじめに

近年、教育政策において新たな時代に対応するため学力観や能力観が重視されるようになってきている。たとえば、OECDは、知識基盤社会を生きる子どもに必要な能力として、キー・コンピテンシー^[1]という学力観を提示している。

このような新たな学力観に関する議論は、幼児教育にとっても無縁なものではない。幼児期の教育は、知識基盤社会における生涯学習の基礎を築くものとして重要視されるようになってきている (OECD 2001)。このことを受けて、先進諸国では、学びや知的教育を中心的テーマとする就学前教育改革が進行しているという (泉 2008)。

本稿で取り上げるドイツも、そのような改革が行なわれている国の一つである。近年のドイツでは、学力向上策の一環として就学前教育の改善が求められている。その中で、特に重視されていることの一つが幼児期からの言語教育である。後述するように、この背景には、移民をはじめとする社会的困難を抱える子どもの学力問題があり、そのような子どもたちのリテラシー教育が喫緊の課題となっているのである (ノイマン 2008)。

このような課題は、幼児教育に何をもたらすのだろうか。従来、ドイツの幼児教育では、学問的な知識・技能の獲得よりも、生活を通じた社会的情緒の発達に重点が置かれてきた。そのため、知的教育やリテラシー教育という課題を前にして、大きな転換を余儀なくされている。このような状況は、国による背景の違いはあるものの、幼児期の知的教育や学びの在り方が問われている我が国にも共通する問題を孕むものといえるだろう。

本稿では、知的教育やリテラシー教育をめぐってドイツの幼児教育ではどのような対応がなされているのかを明らかにするために、就学前教育カリキュラムの改革動向に着目する。その際、改革の中で主眼とされている言語教育にかかわる部分を中心とした検討を行う。

以下では、2000年代以降のドイツの就学前教育カリキュラム改革の概要を整理した上で (II)、ノルトライン・ヴェストファーレン州の教育計画を取り上げ、就学前教育カリキュラムにおける言語教育の位置づけについて検討する (III)。

II. ドイツにおける就学前教育カリキュラム改革の概要

ここでは、2000年代以降から現在に至るまで行なわれている就学前教育カリキュラムの改革動向を概観する。

2014年11月11日受付：2015年1月19日受理

*責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail : snakanishi@nayoro.ac.jp

1. 背景—学力向上策としての就学前教育の改善

ドイツでは、1990年代後半以降、TIMSS（第3回国際数学・理科教育動向調査）やOECD-PISA（生徒の学習到達度調査）などの国際学力調査の結果の不振を受けて、学力水準向上のための教育改革の必要性が認識された（坂野 2004; 小玉 2008）。それに対応して、教育政策に関するいくつかの提言が出されたが、それらの中で特に重点が置かれていたのが、就学前教育の改善に関する事項であった。具体的には、「教育フォーラム（Forum Bildung）」によるものとKMK（常設各州文部大臣会議）によるものが挙げられる^[2]。これらの提言において重要視されているのは、就学前教育内容の公式化、幼児期の言語育成支援、基礎学校との接続強化である。小玉は、このような提言内容を「従来社会・福祉系列に位置づけられてきた就学前教育・保育の学校化、あるいは、幼児教育における知的教育の重点化」として特徴づけている（小玉 2008）。しかしその背景要因として、親の出身階層や出身国の差異が学力に影響を及ぼしていることが指摘されており、さまざまな家庭背景の違いを補償するために知的教育への指向性が強められているのではないかと分析がなされている（小玉 2008）。

2. 国家的カリキュラム・ガイドラインの策定

連邦制を採っているドイツは、教育政策の権限が各州に委ねられているため、近年に至るまで国家的なカリキュラム・ガイドラインを持たない国であった（Oberhuemer 2005）。そのため、カリキュラムに関しては、各保育施設や保育者にかなりの自由裁量が認められていた。しかし、上述のようにPISAの結果から、ドイツの教育システムが社会的な背景の違いに対応していないことが明らかとなった。このことから、いわゆるPISAショック^[3]の後の就学前教育改革においては、幼児期の教育的課題についての国家による枠組みの提示が行なわれ、より強力な規制が目指されている（ノイマン 2009）。その枠組みとは、2004年に各州文部大臣会議と青少年大臣会議によって共同議決された「保育施設における幼児期の教育（Bildung）^[4]のための各州共通の枠組み」（JMK/KMK 2004; 以下、「共通の枠組み」）^[5]である。

「共通の枠組み」は、保育施設を「固有のプロフィールを持った教育施設」であることを強調し、公教育システムの不可欠な一部分であるとしている。その上で、幼児期の学びとしてふさわしいのは、教科

や学問的な原理に基づく学習ではなく、プロジェクト活動を通した日常的な学びであるとしている。具体的な教育課題としては、学び方の学習の促進（学習方法のコンピテンシー）、施設の生活に関する決定への発達に応じた子どもの参加、知的教育、ジェンダーを意識した教育活動、発達のリスクを有する子どもや（重度の）障がいを持つ子どもへの特別支援、特別な才能を持つ子どもへの促進、が挙げられている。教育領域としては、①言語・文字・コミュニケーション、②個人的・社会的発達、倫理・宗教教育、③数学・自然科学・（情報）技術、④音楽教育・メディアとのかかわり、⑤身体運動・健康、⑥自然と文化的環境、の6つが挙げられている。また、保育者の役割は、子どもの主体性の尊重、インフォーマルで探索的な遊びを中心とする子どもの学びに大人が寄り添ったりこれをリードしたりすること、子どもの探究心を喚起し支えることなどが挙げられている。これらに加えて「初歩領域（保育施設）」から「基礎領域（基礎学校）」への移行の最善化に関する項目も設けられている。

このように、「共通の枠組み」では、保育施設における教育を、遊びやプロジェクト学習を通した主体的な子どもの学びに大人が寄り添い、これを支えることとして構想していることがわかる。その中で、言語をはじめとするさまざまな教育領域における学びを促進することが目指されている。

3. カリキュラムの理論的基礎をめぐる議論

以上のように、国家的なカリキュラム・ガイドラインの策定を受けて、州レベルでも独自の教育計画が作成されている。このような状況の中で、ドイツの専門家の間では、カリキュラムの理論的基礎をめぐる対立的な議論が展開されている^[6]。その議論は、幼児期の子どものBildung（ビルドゥング）理解について、子どもの自己形成（内面的な世界構築）プロセスを重視するのか、共同構成とコンピテンシーの発達を重視するのかをめぐるものとなっている。これら2つのBildung理解は、州レベルでの教育計画における理論的基礎として用いられている。自己形成としてのBildung理解は、ノルトライン・ヴェストファーレン州（以下、NRW州と表記）の教育計画において、共同構成／コンピテンシー発達としてのBildung理解はバイエルン州の教育計画においてそれぞれ具体化されている（Diskowski 2004）。

本稿では、これらのうち自己形成としての *Bildung* 理解が具体化されている NRW 州の教育計画を検討の対象とする。

Ⅲ. ドイツの就学前教育カリキュラムにおける言語教育の位置づけ

ここでは、ドイツの就学前教育カリキュラムにおける言語教育の位置づけについて検討するために、「共通の枠組み」における言語教育における課題認識および NRW 州の教育計画における教育領域「言語とコミュニケーション」の内容を整理する。

1. 重点課題としての言語教育

先に示した通り、PISA ショック以降の教育政策において、幼児期の言語教育、特に移民的背景を持つ子どもの言語育成が重要視されている。このことは、「共通の枠組み」においても同様であり、「家庭や保育施設における言語発達と言語育成は、学校における機会の公正さに対して中心的な意義を持っている。それゆえに言語育成は、保育施設と小学校の基本方針でなければならない」(JMK/KMK 2004) [7] が示されている。

これまで、ドイツの幼児教育では、子どもの生活を中心とした「状況的アプローチ」と呼ばれる教育方法が深く浸透してきた。状況的アプローチにおいては、生活を通じたホリスティックな発達が目指されてきたわけであるが、移民をはじめとする社会的困難を抱える子どものリテラシー獲得という問題を前にして、そのようなアプローチの限界性が指摘されるようになってきている。ノイマン (2009) は、リテラシーが学校の成績や子どもたちの教育歴全体に対する決定的基盤となることは明白であるとした上で、ドイツの教育システムにおけるリテラシー獲得に関する教育機会の不均等の存在を指摘している。その上で、状況的アプローチがリテラシー教育にとっては十分なものではなく、「あらゆる子どもの第一言語の習得と外国語の習得ならびに文字の習得を目指した構想」が求められると述べている。

「共通の枠組み」では、先述のとおり、第1の教育領域として「言語・文字・コミュニケーション」が挙げられている。その内容は、以下のようなものとなっている。「言語教育の目標は、子どもが自らの思考を意味のある多様なものとして表現することである。言語育成は、子どもにとって意味のある個人的な関係やコミュニケーション、行動の中に埋め込まれている。言語教育の中心的構成要素は、本、語

り、リテラシーをめぐる子ども期の経験である」(JMK/KMK 2004)。

このように、社会的困難を抱える子どものリテラシー獲得という課題に対して、「共通の枠組み」では子どもの生活経験を中心とした言語教育が構想されていることが読み取れる。「共通の枠組み」では、幼児期の言語教育の在り方についての大枠が示されているのみであるが、その構想が州レベルの教育計画においてどのように具体化されているのかについて次節で検討する。

2. NRW 州教育計画における教育領域「言語とコミュニケーション」

1) 教育計画の概要

NRW 州では、2003 年から保育施設を対象とする教育計画 (『*Bildung* 協定 NRW』) が施行されていたが、2010 年からはその更なる発展である新たな教育計画 (Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen/ Ministerium für Generation, Familie, Frauen und Integration des Landes Nordrhein-Westfalen 2010) が施行されている。

この教育計画では、異なるシステムを有する就学前教育領域と初等教育領域を結ぶことを目的として、両領域における *Bildung* 促進のための共通した原理を持つこと、共通した子ども像および幼年期の子どもの *Bildung* プロセスについての共通理解を前提として、幼年期の子どもの連続した育成プロセスが構想されている (Fabian, et al. 2012)。そのため、0 から 10 歳の子どもの対象となっている。

また、教育原理と目標については、「子どもを中心に置く」ことが掲げられており、以下のような子ども像、*Bildung* 理解、*Bildung* 可能性が想定されている。

①子ども像

ここでの子ども像は、有能な子ども像であり、子どもは自らの発達の立役者として捉えられている。また、フンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) の言う「世界の習得 (Aneignung von Welt)」を行なう能動的な存在として子どもが位置づけられている。

②*Bildung* 理解

ここでの子どもの *Bildung* は、子どもの自己形成、すなわち、子どもは自分を取り巻く世界を解明し、そこに主観的な意味を付与することによって、自ら世界像を構築するものと考えられている。また、それと同時に *Bildung* が社会的なプロセスであることも明示されている。

③Bildung 可能性 (Bildungsmöglichkeiten)

Bildung 可能性は、幼児期のインフォーマルな学びを学校でのフォーマルな学びにつなげるための原理であるとされる。Bildung 可能性は、幼児期の子どもの日常的な状況（散歩、食事等）や物（ラジオ、タイプライター等）、子どもの説明や分析、討論の中に潜んでいるものであり、保育者は Bildung 可能性を見出し、環境構成やはたらきかけに役立てるべきであるとされている。

Bildung 計画の枠組みとしては、3つの基礎コンピテンシー（自己コンピテンシー、社会的コンピテンシー、事物・方法コンピテンシー）と10の教育領域（運動、身体・健康・栄養、言語とコミュニケーション、社会的・文化的・異文化相互的 Bildung、芸術的・美的 Bildung、宗教と倫理、数学的 Bildung、自然科学的・工学的 Bildung、生態学的 Bildung、メディア）が設定されている。また、それぞれの教育領域は、「基本原理」、「Bildung 可能性」、「Bildung 可能性を支え、形成するための問いかけ」、「マテリアル・思考を突き動かすものとしての環境」という項目によって構成されている。この「基本原理」は、就学前教育領域においては Bildung 可能性として明示化され、初等教育領域においては学校カリキュラム (lehrplan) において公式化されている。

2) 教育領域「言語とコミュニケーション」

教育領域「言語とコミュニケーション」においては、生涯に渡って続く言語発達プロセスの起点である幼児期の言語発達を支えるための原理・方法が示されている。子どもが信頼できる環境の中で、さまざまなコミュニケーションを通じて対話能力を発達させたり、文字を習得したりすることによって、次第に言語は自らの思考のプロセスを組み立てるものとして認識されていくことが基本原理として示されている。

このような基本原理のもと、子どもの「Bildung 可能性」としては以下のようなことが示されている。

- ・話し合いの中で伝えること、自分の感情、意見、思っていること、経験などを表現すること。
- ・能動的に聞くこと、そして非言語的な表現形式（身体言語、表情、ジェスチャーなど）を発達させること。
- ・対話のルールを知り、使うこと（他者の顔を見ながら話を聞く、発言をやめる、テーマに沿って話すなど）。
- ・本への興味と物語ることの喜びを発展すること

- ・情報とコミュニケーションのメディアとして文字を知ること。
- ・語彙を増やし、新しい概念を適切に使うこと。
- ・出身言語を話すこと等。

また、「Bildung 可能性を支え、形成するための問いかけ」という形で、保育者の働きかけに関する事項が示されている。その内容は以下の通りである。

- ・子どもたちは話し合いの中で自分の意見を表明する機会を十分に得ているか。
- ・子どもたちとの対話やコミュニケーションの文化を育てているか。
- ・お話をしたり物語を読むときに、子どもの興味や経験が取り上げられているか。男の子と女の子特有の本やテキストが利用可能になっているか。
- ・子どもたちは本、新聞、Eメールなどのような活字メディアが利用できるようになっているか。日常生活やプロジェクトの中で、情報源やコミュニケーションの手段として話す機能が使われているか。
- ・問いかけや情報、助言などの説明の言葉によって子どもの活動・道具の使用、片付け、食事等を支援しているか。
- ・争いを自主的な言葉で解決するように子どもたちは支援され励まされているか。
- ・子どもたちの語彙を増やし、それらを区別して使用するための機会をどのように提供しているか。
- ・おとなしい子どもをどのようにして能動的に議論に参加できるようにするか等。

この他に、「マテリアル・思考を突き動かすものとしての環境」として、語りややりとりのきっかけとなるような出来事と経験、図書館や郵便局での社会見学、さまざまな本、図書館の利用、なぞなぞ・ことば遊び・童謡・手遊び、動物の鳴き声を聞いてまねること、黒板とチョーク・アルファベット・数・本・古いタイプライター・パソコンとそれに対応するソフトウェアなどの部屋の設備、歌遊び、劇遊び・物語からの即興遊び、パントマイム、子どもの経験を書き取った日記、様々な文字とシンボル（楔形文字、象形文字、アラビア語、中国語、日本語、キリル文字）、子どもたちの母国語を取り上げる、子どもたちが関心を持つ話題について新聞を読むこと、等が挙げられている。

このように、NRW州の教育計画では、子ども自身が持つ「Bildung 可能性」、その Bildung 可能性を保育者が見出し育てていくための「Bildung 可能性を支え、

形成するための問いかけ」, 子どもの言語発達を豊かなものとするための「マテリアル・思考を突き動かすものとしての環境」という3つの観点からその基本原理が具体化されている。日本の幼稚園教育要領における領域「言葉」の内容と比較すると, 内容が詳細に提示されており, またさまざまな言語経験に関する要素が織り込まれている。このことは, 移民をはじめとする社会的困難を抱える子どものリテラシー獲得という課題に対して, 単なる詰め込み教育とは異なる形でいかにして対応するかという努力を見て取ることができるのではないだろうか。

III. おわりに

以上に見てきたように, ドイツの就学前教育カリキュラム改革では, 学力問題への対応として幼児期の言語教育が主眼とされていること, 移民をはじめとする社会的困難を抱える子どものリテラシー獲得が課題となっていること, 国家的カリキュラム・ガイドラインや NRW 州の教育計画においては子どもの多様な言語経験を軸とする言語教育が目指されていることが明らかとなった。

これまで, ドイツの幼児教育では, 国家によるカリキュラム枠組みによる規制を受けることなく, 生活に軸を置いた柔軟な教育が展開されてきた。筆者が NRW 州の保育施設を訪問した際には, このような新たなカリキュラムは, 必ずしも肯定的に受け止められていたわけではなく, 保育者からは戸惑いの声が聞かれた (中西 2014)。カリキュラムを見ただけで, ドイツの幼児教育の実情を知ることはできないが, 学力問題を契機として, これまでの教育方法が教育の機会均等という点においては不十分であったことが認識され, リテラシー教育や知的教育を含みこんだ新たな幼児教育の在り方が構想されようとしている点は, 注目に値するのではないだろうか。

ドイツの幼児教育が直面しているこのような課題は, わが国には無縁なものだろうか。移民問題を背景とする学力問題が幼児教育にまで波及したことはドイツ固有の問題であるのかもしれない。しかし, 近年我が国でも議論されている新たな学力観に基づく生涯学習という構想が, 幼児教育に本質的な変化を迫るものになるのだとすれば, わが国においても新たな課題を見据えた幼児教育の再構想化が求められることになるだろう。そのように考えれば, ドイツにおける議論や取り組みは, どのような視点から

新たな課題にどのように幼児教育が対応するのかという問いに対する一つ応答として見ることができる。

脚注

- [1] キー・コンピテンシーは, OECD のプロジェクトである DeSeCo(Definition and Selection of Competencies)によって定義されたものである。詳細については, ドミニク・S・ライチェン, ローラ・H・サルガニック (2008) キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして(立田慶裕監訳) 明石書店. を参照。
- [2] これらの提言内容については, 坂野(2004), 小玉(2008)において詳しく紹介・整理されている。
- [3] 2000 年の PISA の調査結果のドイツの順位が平均をはるかに下回ったことに対する衝撃は, 「PISA ショック」と称されている。
- [4] ドイツ語の *Bildung* は多義的な概念であり「陶冶」「人間形成」「教育」などの訳語が充てられている。本稿では, ドイツ特有の教育的概念を指す場合には原語のまま表記し, 文脈に応じて「教育」と訳す。
- [5] 「共通の枠組み」の内容については, ノイマン (2009) および豊田 (2012) においても取り上げられている。訳文については, 両論文を参考とした。
- [6] これらの議論の詳細については, 中西さやか (2014) ドイツにおける保育の教育的課題の概念化をめぐる議論. 教育学研究 81(4) : 473-483 を参照。
- [7] 訳文については, ノイマン (2009) 108-109 頁を参考とした。

文献

- Diskowski D (2004) Das Ende der Beliebigkeit? : Bildungspläne für den Kindergarten. Diskowski D, Bernardo EH-D (hrsg.), Lernkulturen und Bildungsstandards: Kindergarten und Schule zwischen Vielfalt und Verbindlichkeit. S.75-104. Schneider Verlag Hohengehren, Baltmannsweiler.
- Jugendministerkonferenz/Kultusministerkonferenz (JMK/KMK) (2004) Gemeinsamer Rahmen der Länder für die frühe Bildung in Kindertageseinrichtungen, http://www.kmk.org/fileadmin/veroeffentlichungen_beschluesse/2004/2004_06_03-Fruehe-Bildung-Kindertageseinrichtungen.pdf, 2014年4月20日閲覧)
- Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen/ Ministerium für Generation, Familie, Frauen und Integration des Landes Nordrhein-Westfalen (2010) Mehr Chancen durch Bildung von Anfang an-Entwurf-Gurundsätze zur Bildungsförderung für Kinder von 0 bis 10 Jahren in Kindertageseinrichtungen und Schulen im Primarbereich in Nordrhein-Westfalen, http://www.mfkjks.nrw.de/web/media_get.php?mediaid=17282&fileid=51011&sprachid=1, 2014年9月20日閲覧
- Oberhuemer P (2004) Controversies, chances and challenges: reflections on the quality debate in Germany. *Early Years* 24: 9-21.
- 泉千勢 (2008) あとがき 子どもの発達を学びの視点でとらえ直す. 世界の幼児教育・保育改革と学力 (泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編著) p.360-365. 明石書店
- 小玉亮子 (2008) PISA ショックによる保育の学校化—「境界線」を越える試み—: 世界の幼児教育・保育改革と

- 学力(泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編著) p.69-88. 明石書店
- 坂野慎二(2004) ドイツにおける PISA ショックと教育政策, ドイツ研究 **37/38**: 33-43.
- 中央教育審議会(2008) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申). 文部科学省
- 豊田和子(2012) 統一後のドイツにおける保育・就学前教育事情(その3) —ベルリンの教育プログラムにみる就学前教育改革—. 桜花学園大学保育学部研究紀要 **10**: 43-63.
- 中西さやか(2014) ドイツにおける幼児期の Bildung をめぐる取り組み—ハンブルクおよびノルトライン・ヴェストファーレン州の保育施設訪問から—. 名寄市立大学紀要 **8**: 79-83.
- ノイマン K(2009) 幼児教育学における鍵的能力としてのコミュニケーション—国際比較のなかの日本とドイツ—. (大関達也・小林万里子訳) 学校教育学研究 **21**: 97-114.

Original paper

Recent Reforms of Pre-School Education Curriculum in Germany:

Focusing on Language Education

Sayaka NAKANISHI^{1),*}

¹⁾Department of Early Childhood Education and Care, Nayoro City University Junior College

Abstract: In this paper, we organized and studied reform trends for pre-school education curriculum that are centered on language education to clarify how intellectual education and literacy education are dealt with in German early childhood education. The results revealed that, in Germany, literacy education has become a major issue for children facing social difficulties, including immigrants. In order for the curriculum to foster language in children through everyday life, the educational challenges were made explicit.

Key words: pre-school education, curriculum, language education, Germany, literacy